

2021 年度日臨技精度管理調査 輸血検査報告 その2

—実態調査より—

◎三浦 邦彦¹⁾、谷口 容²⁾、福吉 葉子³⁾、西岡 純子⁴⁾、国分寺 晃⁵⁾、奥田 誠⁶⁾
医療法人溪仁会 手稲溪仁会病院¹⁾、独立行政法人 国立病院機構 金沢医療センター²⁾、熊本大学病院³⁾、日本赤十字社 血液事業本部⁴⁾、広島国際大学⁵⁾、東邦大学医療センター大森病院⁶⁾

【はじめに】日本臨床衛生検査技師会では、毎年全国規模での「日臨技臨床検査精度管理調査」において、アンケート形式による実態調査を実施している。実態調査より全国的な輸血検査の実施体制を明らかとすることで、自施設における輸血検査体制を見直し、検査精度の維持向上に務める必要がある。【方法】日臨技精度管理調査 輸血部門に参加した全国2,745 施設を対象に実態調査を行い、2,322 施設（84.6%）から得られた回答をもとに解析を行った。【結果】ABO 血液型検査では日勤帯で40.8%の施設が試験管法、カラム凝集法では54.2%と試験管法実施施設は年々少なくなっている。不規則抗体スクリーニングではカラム凝集法が66.0%と最も多く、試験管法は30.0%と減少傾向にある。一方、交差適合試験においては、試験管法による実施施設が47.4%と最も多く、コンピュータークロスマッチのみは4.3%であった。検査方法では間接抗グロブリン試験を含めた方法で実施している施設が94.2で、間接抗グロブリン試験で使用する反応増強剤は、ガイドラインで推奨されているLISSもしくはPEGを使用している施設が95.9%、重合アルブミンもしくは未使用

の施設が3.6%であった。試験管法におけるIgG感作赤血球使用については、94.7%が使用しているが、5.3%は一部使用もしくは未使用であった。不規則抗体スクリーニングにおけるDi(a+)抗原を含む赤血球試薬の使用については97.5%が使用していた。輸血検査の従事者については、検査技師以外（医師・看護師・薬剤師・事務員）による血液型検査が、日勤帯で1施設、夜間・日直帯では3施設実施されていた。【考察・結語】ヒューマンエラーの防止および検査の標準化による検査精度の均一化を目的に自動分析装置の導入が進み、血液型検査および不規則抗体検査では、カラム凝集法での実施率が増加傾向にあるが、交差適合試験においては試験管法での実施施設が最も多い。安全な輸血医療を提供するためには、「赤血球型検査（赤血球系検査）ガイドライン（改訂3版）」が推奨する検査試薬および検査手順で検査を行うこと、また、精度管理により精度が保証された輸血検査の24時間体制の確立は必要不可欠と言える。連絡先 011-681-8111（4409）